

従来のアレンジによる光豊かな居室群

特別養護老人ホーム 紫水苑新館

設計 ■ 矢板久明・矢板直子 / 矢板建築設計研究所 ■

施工 ■ 安藤建設

所在地 ■ 埼玉県川口市

SHISUIEN SPECIAL NURSING HOME FOR THE ELDERLY
architect ■ YATAI AND ASSOCIATES ■

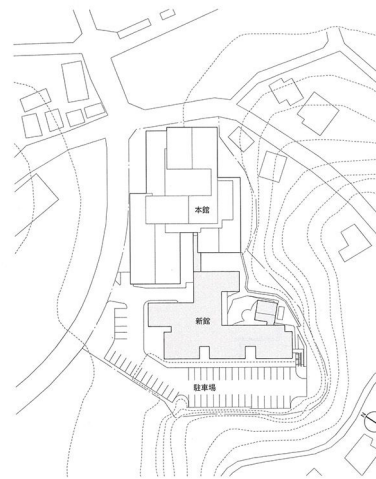




バルコニーと柱、手摺りの構成。



西側から室内の会話コーナー、緑遊の方向を見た夕景



配置 縮尺 1/1,200



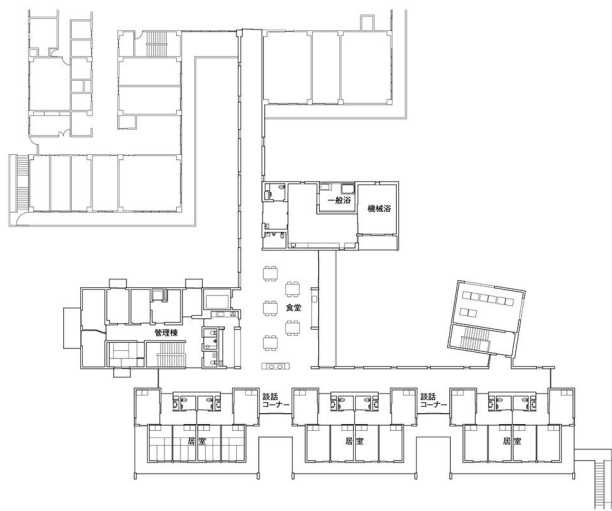
北立面 縮尺 1/600



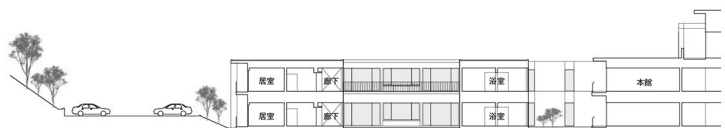
北側からの外観。左に既存本館が見える。管理棟(中央)と居室棟(右)でボリュームを分節している。



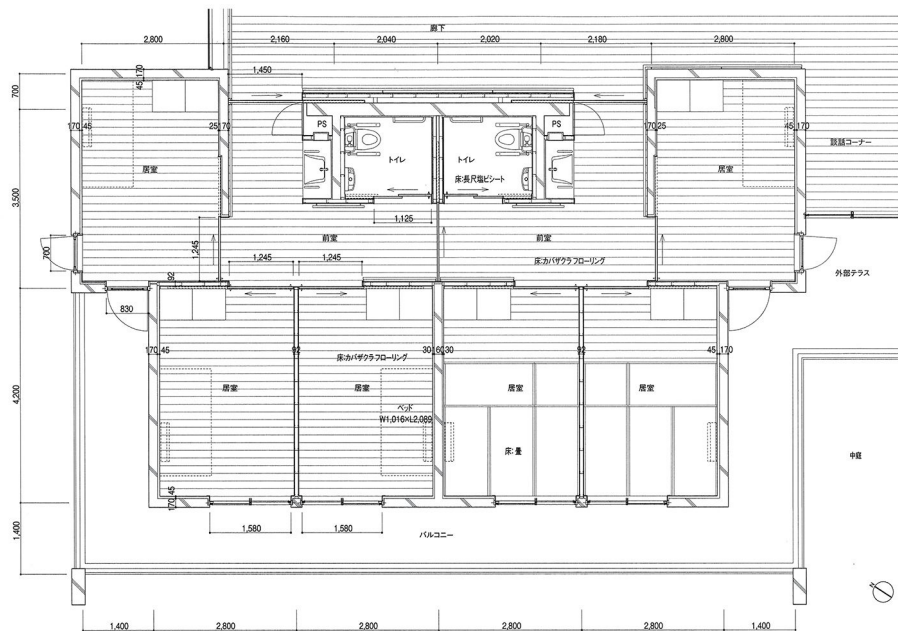
西側からの外観全景。居室棟の3棟が分節されている。手前の駐車場とは1.4mのレベル差がある。



1階、食堂を見る。右手に居室棟への廊下。



1階廊下、天井高は2,700mm。左手中庭側に並ぶ開口幅はフィボナッチ数列によって決められている。



居室棟平面詳細 縮尺 1/100

紫水苑新館——新型特養と従来型の間で

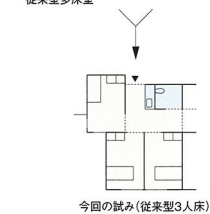
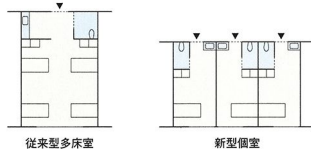
敷地周辺は宅地開発が進みつつある市街化調整区域で、以前からあった雑木林の法面に囲まれたところである。

現在、国が主導する特別養護老人ホームは10人以下の生活単位をまとまりとする個室主体のユニットケアによる新型特養であるが、1999年に竣工した既存本館は個室から4人部屋までを複数組み合わせさせて配置し、トイレは共用という従来型の施設である。この施設の増床に際し、新型か従来型かという選択が最初の岐路にあった。選択されたのは既存施設との連携と地域事情を考慮、入居者の費用負担の差が付きすぎず、ケア体制も踏襲できる従来型での建設であり、この方法が最も現実的な方法と判断された。

従来型をアレンジし、光を入れる

まず、この増床計画の中で解決しなければならぬことは、居室のあり方そのものであった。ここで私たちが採用したのは、従来型ではあるが、日の射さないベッドができてしまう単純な多床室を避け、3人用の居室を1単位として角部屋になるよう配置した。これを間仕切り、3つの個室とトイレ洗面が

ある居室単位(これを私たちは「3人床」と名付けた)をつくることにした。こうすることで、各部屋に光が入るようになり、個室の入口はメインの廊下から少し奥まったところになるので、プライバシーの高い居室となった。そして「3人床」からの入口は廊下の幅も広くし、門灯をつけた内玄関風の設えと



したことで、部屋が並列する単調さも避けることができたように思う。

中庭を囲う

配置計画は、2層12室からなる居室棟3棟と管理棟、浴室棟、そしてターミナルケアを視野に入れたゲスト棟の6つのブロックを、十分な光が入るよう、それぞれを離しながら配置し、食堂、談話コーナー、廊下からなる共用空間でそれらの中庭を囲うように繋いでいった。ゲスト棟は、既存の受水槽や石垣と平行に置くことで、能舞台のように他の棟から少し離れた配置となり、中庭の構成要素のひとつとなるように扱っている。

駐車場は1.4m程マウンドアップし、居室棟との緩衝ゾーンとして傾斜した緑地帯を設けた。増築棟全体は雑木林に囲まれるようになり、緑に囲まれたリゾートライクな環境になったと思う。

建築全体の設計を通して意識したことは、終の住処として、生活の各場面でも居心地よく暮らせるよう配慮することで、明るさと広がり特に重視した。でき上がった建物は十分な光と緑に囲まれ、期待通りさわやかな空間に仕上がったと感じている。

(矢板久明+矢板直子)

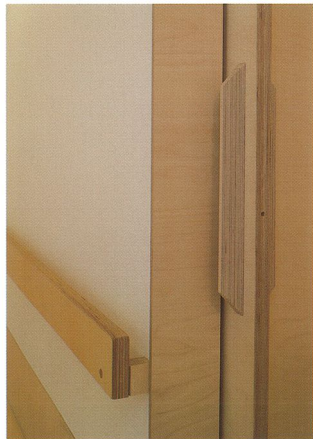
151~153



居室棟入口から見る。入口の天井高は550mm抑えられ2,150mm、居室の天井高は2,700mm。奥にふたつ、右手にひとつ居室があり、左手に水回り。3人でひとつの居室単位をつくる。この居室単位が隣にもうひとつあり、2層分計12室でひとつの居室棟を構成している。



前室から居室を見る。パーチ合板がアレンジされながら、開口部や入口の枠回り、手摺り、引き手、引き戸など、すべてに用いられている*

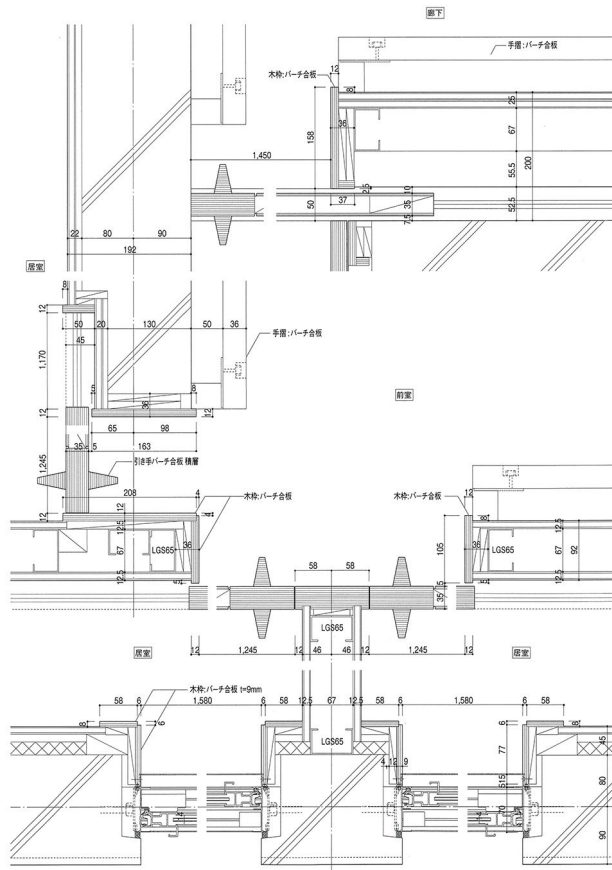


手摺り、枠、引き手、引き戸詳細。

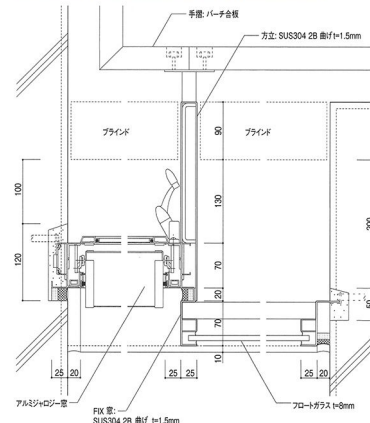
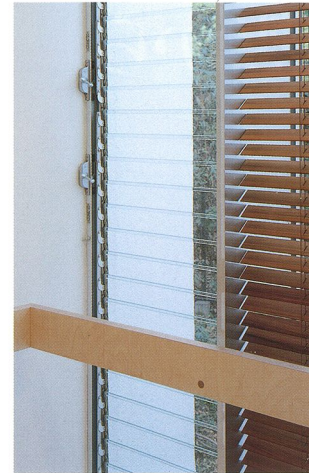


廊下の中庭側開口部枠回り。上部には30mm厚、側部には9mm厚のパーチ合板。

素材を限り、アレンジによってつくり出すディテール
 老人福祉施設は、随所に手摺りが必要であり、また、ドアも引き戸が主体となり、これらをどうつくるかが重要となる。便利な既製品を使用する方法もあるが、これを避け、なるべく木の温もりと、手をつくった痕跡を残した内装にしたいと考えた。
 木材を使うにしても雑多な材料が混在することは避けたいので、今回は、フィンランド産のパーチ合板を使うこととした。この合板は、材質も固く、積層した木口も色の濃淡が明瞭で美しいので、あらゆることに使うことができた。手摺り、引き手、天板等には何枚かを積層したものを削り出して使い、開口枠の見込み方向は十分丈夫なので単板のままのパーチ合板を貼った。見付けには積層合板の薄い木口を見せたり、必要な場合は見付け側にも合板を貼って大枠として用いたりといった具合である。
 このように今回はほとんどの木部分をごこのパーチ合板で製作することができたので、白い壁とパーチ合板という2色の単純な美学の構成が実現した。
 (矢板久明+矢板直子)

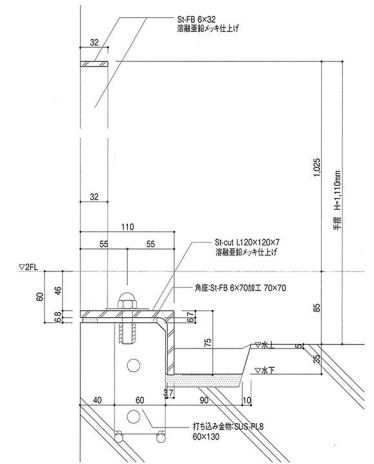


居室棟建具・枠回り平面詳細 縮尺1/8



方立・FIX窓・ジャロジー窓納まり平面詳細 縮尺1/8
 廊下のある突き当たりの開口部は、FIX窓とジャロジー窓を一体に取り付けた。住宅系の建物では少々雨でも換気可能なジャロジー窓が便利である。ここでは開口部の開放的な印象を損なわないよう、FIX窓とジャロジー窓のガラス面は取り付け位置を前後にずらし、ステンレス方立にジャロジー窓取り付け用のポケットをつくり、納めてある。
 (矢板久明+矢板直子)

所在地 埼玉県川口市
 主要用途 特別養護老人ホーム
 建主 水梅会
 設計 建築 矢板久明+矢板直子/矢板建築設計研究所
 構造 構造設計社 すず製作所
 設備 島津設計
 施工 安藤建設
 敷地面積 7,099.56m²
 建築面積 1,084.81m²
 延床面積 1,946.15m²
 階数 地上2階
 構造 壁式鉄筋コンクリート造
 工期 2006年8月～2007年3月
 撮影 本誌写真部 稲垣泰介
 *写真提供：矢板建築設計研究所
 (データシート224頁)



手摺り部分断面詳細詳細 縮尺1/6
 バルコニーの手摺りのデザインは、避難の際に障害にならないよう、廊下側に飛び出すような控えを用いず、手摺りだけで自立するように工夫した。
 躯体に丸管を打ち込むような要領で、鉄筋が通る穴を開けたステンレスの羽子板を、上部が躯体と同一面になるように打ち込み、手摺り子の下端につけられたアングルとスチールのスペーサーを介してポリイソプレチンで締め付け、最後に隙間にモルタルを充填し固定した。
 (矢板久明+矢板直子)



2階から中庭、ゲスト棟を見る。*

新建築

SHINKENCHIKU:2007

7

